

代打川又

〇池田真也

場所は名古屋

◎夜。

名古屋都市高速道路を走っている一台の車。運転する松本章吾(24)と助手席の森川奈緒子(22)。後ろの席には章吾のギターケースがおいてある。

章吾「今日吉田から話があつてさ」

奈緒子「・・・」

章吾「どうも本決まりになりそうなんだ・・・東京の事務所と契約できらしいんだ。最初はどき回りだつて・・・」

奈緒子「聞いてないわよ」

章吾「嘘だろ、だつて吉田が・・・」

奈緒子「あなたから直接聞いてないっていうこと・・・なんでいきなり言うかなあ・・・それで行くの？行かないの？」

章吾「わからない」

奈緒子「わからないじゃないでしょ。どうするのよ。私はどうなるわけ？ちゃんと考えてよ」

章吾「考えてるさ！一日中そのことばかり考えてる。でもどうしたらいいのかわからないんだ」

奈緒子「私はついて行かないからね。東京になんか絶対行かない」

章吾「……」

奈緒子「父さんがね……母さんが生きていたらともかく、あんな
だらしのない人、私が近くにいないと」

章吾「わかってるよ」

章吾、ラジオをつける。野球中継をしている。アナウンサー

「……スリーアウト、チェンジ。ドラゴンズこの回も三者凡退に
終わりました。ナゴヤ球場からお送りしています、中日対巨人の首
位攻防戦は3回ウラが終わって今中、桑田両投手の投げ会で依然
0対0のままです」

章吾「よし、決めるよ」

奈緒子「え……」

章吾「この試合中日が勝てば俺は名古屋に残る。音楽を捨ててお前
と結婚する。もし巨人が勝てばバンドの奴らと一緒に東京に行く」

奈緒子「なにそれ？あんなに考えてんのよ。そんな大切なこと」

章吾「大切だから決められないんだ。いいか、ガキの頃から俺は頭
が悪かったしスポーツだって得意じゃない。こんな俺でもギターが
あったから今までグレずに生きてこれたんだ。音楽は俺の全てなん
だ」

奈緒子「知ってるわよ。そんなこと」

章吾「そして俺には奈緒子も・・・めっちゃめっちゃ大切になんだ。いままでこんなに誰かのことを好きになったことないし、たぶんこれからもないと思う。女房にするなら奈緒子しかないってずっと思ってた」

奈緒子「・・・」

章吾「でもバンドは東京に行くっていうし、奈緒子は名古屋から出ないっていうし、俺は大切なものをどっちか捨てなきゃいけないんだぜ。簡単に決められねえよ」

奈緒子「・・・バカみたい。勝手にすれば」

◎5回表

二人は無言。ラジオを聞き入っている。

アナウンサー「5回表ジャイアンツの攻撃、得点は以前0対0のまま。バッターは松井。カウントはワンスリー、ピッチャー今中ふりかぶって第4球目投げました。打った！打球はグングン伸びる！ライトバック、なおバックなおバック。ライト見送っている。入ったホームラン、首位攻防戦の均衡を破る松井の第100号ソロホームランが飛び出しました！」

奈緒子「やったあ！」

驚いて奈緒子を見る章吾。

章吾「なんだよ、お前」

奈緒子「何がよ、知ってるでしょ、私は熱狂的な巨人ファンなの」

章吾「知ってるけどさ、何もこんなときに巨人を応援することないだろ」

奈緒子「私はドラゴンズが大嫌いな。セクハラしてくる上司よりも嫌い。だからドラエモンでもドイツ人でもドラゴンズのドの字を聞いただけで鳥肌がたってくる」

章吾「お前だって名古屋人だろ、だったら中日応援しろよ」

奈緒子「あなたがどこを応援しようが勝手だけど私の趣味まで干渉しないでくれる」

章吾「巨人ファンに名古屋に住む資格なんてねえよ」

奈緒子「ドラゴンズこそ名古屋から出て行けばいいのよ。ドラゴンズのせいでどれだけの名古屋の女が不幸になってるのか・・・」

章吾「なんだそれ」

奈緒子「負けたら荒れるし、勝ったら勝ったで暴れるし」

章吾「そんなことはない」

奈緒子「ある。そうやって自分の都合で周りの女がどれだけ泣いてるか、男は気づくことさえもないんだわ」

章吾「おおげさだぜ。じゃあ言うけどお前は俺と結婚したくないんだな」

奈緒子「・・・そんなこと言っていないでしょ」

章吾「だったら今日ぐらいドラゴンズ応援しろよ」

奈緒子「・・・許せないのよ、ドラゴンズだけは絶対許せない」

◎回想、昭和63年9月。病院。

奈緒子の母萌子の病室。萌子の口には酸素吸入器が当てられ彼女のまわりを医師や看護婦が忙しそうに動いている。奈緒

子は萌子の横で母親の手を握っている。萌子、奈緒子に向かって何か言おうとしている。

奈緒子「え、なに、お父さん？お父さんなのね。今呼んでくるから。すぐに呼んでくるから」

病室を出て行く奈緒子。

◎父親を探して病院中を走り回る奈緒子

◎病院のロビー

テレビでは野球中継が流れている。人だかりができており

人々はドラゴンズの選手のプレイに一喜一憂している。その中に奈緒子の父親悠祐の姿があった。

奈緒子「お父さん！」

奈緒子を見る悠祐。

奈緒子「……なにもこんな時まで……」

◎ 萌子の病室。

萌子の顔には白い布がかぶせられている。泣いている悠祐、その横で悔しそうに両手を握り締めている奈緒子。

◎ 章吾の車

アナウンサー「……セカンドに転送ツーアウト一塁に転送一塁もアウト、ダブルプレイ。6回ウラドラゴンズ、チャンスを逃しました。6回を終わって、1対0とジャイアンツがリードしています」
章吾「畜生」ハンドルを叩く

奈緒子「ざまあ見ろよ」

◎ 9回ウラ。車は公園に止めている。

アナウンサー「……センター前ヒット、一塁ランナーは一塁ス

トップ。ドラゴンズも粘ります。9回ウラ、一点を追うドラゴンズの攻撃はツーアウトながらランナー一塁二塁。ここで立波をむかえます」

章吾「勝つよ」

奈緒子「え？」

章吾「今日ドラゴンズ勝つよ。きっと勝つ。おれ今までどんなに歩いてない時でも、最終的などころでは絶対に運がいいんだ」

奈緒子「打たれないわよ。桑田は打たれない」アナウンサー「打つた！ボテボテのゴロだ。サードが取った一塁へ送球」

思わず身を乗り出す章吾

奈緒子「いやあああ」

アナウンサー「セーフ！立波執念の内野安打！フルベース、ツーアウトフルベース！土壇場にきてまったくわからなくなりました」

大きく息をつく奈緒子。章吾は奈緒子がほっとしているのに驚き奈緒子を見る。

我に返る奈緒子。

奈緒子「頑張れ桑田」

アナウンサー「高木監督が出て来ました。ピンチヒッターです。川又です。ここはこの人しかいないでしょう。背番号23、川又米利

がゆっくりとバッターボックスに向かいます」

なにも言わずラジオに聞き入っているふたり。

奈緒子「この試合どっちが勝つと思う」

章吾「ドラゴンズが勝つよ」

奈緒子「ジャイアンツが勝つわ。いざというときにはドラゴンズは勝てないのよ」

章吾「今日は勝つよ」

アナウンサー「打ったー！」

身を乗り出すふたり

アナウンサー「打球は右中間へぐんぐんのびる。ぬけるか！センター屋敷俊足をとばしてバック、なおバック！追いつくか？追いついたらファインプレーだ」

いきなりラジオを消す章吾。

奈緒子「ちよっと、なにすんのよ」

章吾「ぬけたよ。ドラゴンズが勝ったんだ」

奈緒子「わからないじゃない。屋敷だったらおいつくわ」

奈緒子、ラジオをつけようとして右手を伸ばすが章吾の左手がそれを押さえる。

章吾「屋敷にはとれないよ」

奈緒子「わから・・・」

章吾「お前が好きだ」

奈緒子「え？」

章吾「結婚しよう」

奈緒子「だって・・・」ラジオのほうを見る。章吾「音楽諦めるよ。名古屋に残って地道に働く。だから俺でよければ・・・結婚してくれ」

顔色が変わる奈緒子。

奈緒子「私で・・・いいの」

奈緒子を抱き締める章吾。章吾の首に手を回す奈緒子。

◎同

シートを倒して空を見ているふたり。

章吾「なあ、あの打球抜けたのかなあ」

奈緒子「そりゃあ・・・（言いかけてやめる）どっちだと思う？」

章吾「さあ・・・どっちでもいいや」

奈緒子「そうね、あした新聞見ようよ」

章吾「ああ」

終わり

